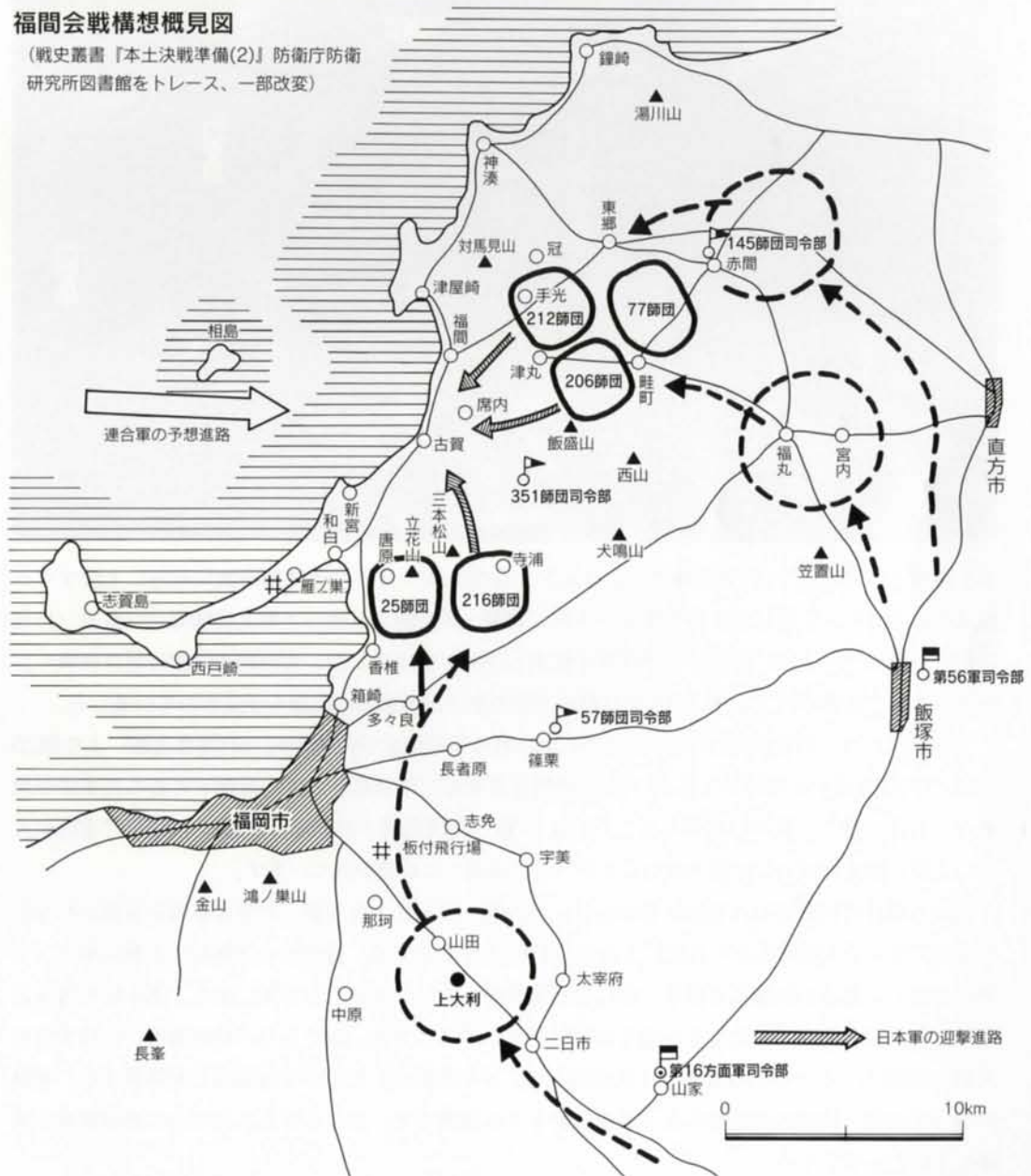


ほん とう けつ せん 本土 決 戦

大野城市教育委員会

福岡会戦構想概見図

(戦史叢書『本土決戦準備(2)』防衛庁防衛
研究所図書館をトレース、一部改変)



上の地図をご覧ください。これは『戦史叢書 本土決戦準備(2)』収録の図を改変したもので、福岡方面に上陸する連合軍を迎撃する日本軍の配置と迎撃進路を表したものです。

太平洋戦争末期、日本本土における連合軍の上陸とそれともなう軍の配置が計画されました。



本土決戦と呼ばれます。「戦史叢書」によると、北部九州では連合軍は福岡海岸周辺に上陸すると想定されました。これに対し日本軍は、赤間・福岡・津屋崎など敵の予想上陸地周辺に野砲（作戦に用いる移動式の大砲）部隊や戦車部隊を配置し決戦に備えました。大野城市山田付近は決戦へむかう日本軍の進撃目標となり、周辺では敵の突破を防ぐため戦車の配置も予定されていました。

北部九州には、昭和20年3月ごろより本土決戦の兵備強化のため満州（中国東北部）より第25師団・第57師団が転用されました。第57師団は篠栗町に司令部を置き、指揮下にある各連隊を周船寺・日佐・香椎・久原に配置しました。この第57師団指揮下の部隊のうち、工兵第57連隊が大野村、現在の太宰府市に配置されたことが「戦史叢書」には書かれています。

上の写真は太宰府市上大利地区を中心に、下大利・南ヶ丘・白木原・太宰府市周辺を空から写したものです。上大利の人たちの話によると、昭和20年3月ごろ、満州から兵隊が上大利に来て、三兼池の近くにある山に横穴を掘り、中には野砲を据えていたとのこと。また、旭ヶ丘や南ヶ丘周辺には兵隊の防空壕がたくさん掘られていたということです。おそらく「戦史叢書」に見える工兵第57連隊のことと思われます。工兵部隊とは、軍の作戦にしたがって陣地などを構築する、戦場にあって攻撃・防御の基点を作ることを任務とする部隊です。おそらく上大利の山に野砲陣地を構築していたのでしょう。

結局本土決戦はおこなわれないうちに終戦を迎えましたが、まったく戦争とは無関係に見える大野城市にも意外な戦争の痕跡があることを確認するとともに、今の平和に感謝したいと思います。

（参考文献 防衛庁防衛研究所図書館所蔵戦史叢書「本土決戦準備(2)－九州の防衛－」朝雲新聞社）